
俺と世界と電視の力

レイアン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

俺と世界と電視の力

【Nコード】

N2304W

【作者名】

レイアン

【あらすじ】

「嘘・・・だろ・・・」

それは一瞬の出来事。目や耳で認識することなく、身をもって感じた。

自分に雷が直撃したと。

だが、不幸中の幸いか、生きていた。

そして、目が覚めたとき、見ることが出来たのは、天井と何かの数字、それと一緒にある矢印。

彼はそれが電気を視る力であると伝えられる。

そして、彼はそれを伝えた軍の大佐から、依頼を受ける。

一人の高校生が受ける軍からの仕事。

それをいつもと同じように受ける彼。

これは、普通とは違う生き方をしながらも、普通の高校生として日々を過ごす一人の少年の物語。

プロローグ 異能が宿りし日

セミが一夏の命をかけて鳴くそんな真夏の日。

大型台風九号が大阪を直撃した。南の沖縄よりずっと東の位置で発生し、それはもう、見事なまでに大阪に向かって一直線に。

それによる影響によって、当然ながら、暴風警報が出て、高校はもちろん休み。

俺は、突然訪れた休みを友人と出かけて、映画を見に行くことにした。

学校側からしたら、家で自習しとけという話なのだろうが、そんなことは関係ない。休みは休みらしくエンジョイしなければ。

しかも、風は強いが、雨は降るどころか、ところどころ青空が見えているぐらいなのだから、これを使わない手はない。

「これで、学校休みかよ。最高じゃねえか。なあ、黒瀬」

「・・・」

おや、返事がない。それにやけに静かだ。そう思いながら、左を見してみる。すると、そこには、自前のノートパソコンを使いながら、自転車に乗る俺の親友がいた。

使いながら？

普通なら、ありえない状況だ。だが、この場合、片手でやってるのなら、まだ頑張ればうなづける。だが、こいつは違った。さも当然のように、両手を使い、タイピングをしているのだ。

「あの・・・黒瀬・・・お前、大丈夫か？」

「ああ、大丈夫だぜ」

そう言いながら、道にある鉄柱なり、人なりを体を傾けたり、時には片手を使って、避けていく。やつの手は止まることはないし、ディスプレイから、目を離してもいない。

この場合、明らかなことだが、なにか事故を起こしてしまったら、やつの前方不注意が原因となってしまう。だが、なぜか、今のところ

ろ、事故を起こしてはいない。本当なら、全力でとめるべきだろうが、こいつのパソコン好きはとめられない。

そんなことを思い出した俺は、あえて、何もしないことにする。

そんなふうに、事故の心配をしつつも、自転車を走らせていると、案の定、隣から何かに、衝突した音が聞こえた。

「おい、てめえ。前を見ないで、パソコンを見ながら、自転車とはどういうことだ」

自転車を止め、斜め後ろを見ると、不良に絡まれる黒瀬の姿がそこにはあった。俺はすぐに、謝りに行こうと駆け寄ろうとするが、俺よりも速く動いたやつがいた。

黒瀬唯。名前から分かるように、やつと彼女は兄妹だ。普段、おとなしそうで、かわいらしい笑顔を振りまく彼女だが、今の彼女にそんな優しさやおとなしさは全くもって感じられない。

今、彼女から感じられるのは怒り、いや、冷え切った鋭い殺気。

「お兄様に、けんかを売るとはいいい度胸をしていらっしやいますね」

「ああ、何だ、てめえは。部外者は引っ込んでろ」

不良たちは、突然現れた邪魔者を排除しようと動き出す。数は三人。普通の少女なら、こんな状況を目の前にしたら、恐怖に駆られるだろう。

だが、唯の目には哀れなものを見るような蔑みの光しかなかった。我ながら、他人とはずれていると思う俺から見ても、普通とは明らかに違う少女だと思う。だが、そんな外見は彼女にとって、はつきり言って、どうでもいいことなのだろう。結局のところ、彼女にとって重要なのは、目の前にいる兄に対して、無礼なまねをしたものどもを排除することなのだろうから。

彼女は、親指と人差し指の間に、パチンコ玉を挟み込んでいく。それに、徐々に力を込めていき、一気に弾き飛ばしていた。不良たちに向かって。正確には、命令を出したやつの顔をギリギリ掠めるところを。

男の顔には、一筋の血が流れる。怒りで我を忘れ、真っ赤に染ま

った男の顔が、急激に青ざめていく。

もう、終わりだ。それを見ていた俺は、そう確信し、安心する。安心するって言うのは、相手から戦おうという意志が消えてくれたことに對してだ。

じゃなければ、俺が無理やり介入せざる終えなくなっただろう。かといって、今、介入しなくて大丈夫かといわれると、そうでもないのだが。

あの妹の怒りはまだ冷めてはいない。冷めるどころか、どんどん上がってきている。そんな唯を出来る限り速く移動させるべきだと俺は判断した。なぜなら、そうしなければ、彼女の怒りがいつ爆発してもおかしくないからだ。

「黒瀬兄妹、行くぞ。そちらの皆さんもそれでよろしいですね？」
選択肢は一つしかない質問を男たちに投げかける。

その問いかけに對し、男たちに出来たのは、ただうなずくだけで声をだすことはなかった。いや、発することができなかったが正しいか。しかし、それは当然のことだろう。

死の気配を感じて、何事もなかったかのごとくいられるほうがおかしい。

そんな恐怖に支配された男たちをそのままにして、俺たちは映画館に向かった。

ちなみに、唯の怒りはというと、彼女の兄に諭されたことにより、映画館についた頃には完全に静まっていた。

見た映画は世界を魅了したファンタジー映画。なかなかの出来で、続編が出たら、見てみたいところだ。

最後に、スタッフロールが流れると、映画は終わった。

「次はどこに行く？」

映画館の天井にある明かりがつき始めたとき、俺は二人に對してそう聞いた。だが、返事はなかった。

兄弟の方を見てみると、妹は兄の肩に寄り添って、兄は妹のほうに頭を傾けて、どちらも爆睡していた。二人とも、安心しきった幸

せそうな寝顔を見せていた。

この幸せな顔を見ると、起こす気が半減されるわけだが、それでも、人がほとんど出て行ってしまったので、起こすことにする。そして、そうしようとしたとき、兄の方は目を開き、起き上がった。

「おはよう、夢二」

「おはよう、明。そろそろ帰るから、その妹さんを起こしてくれ」

「いや、起こすのはかわいそうだろう。こんなにもぐっすり寝ているんだから。俺が運んでいくよ」

「そうか、でも、大丈夫なのか？」

「ああ、両手なしでも運転できるからね」

「いや、事故を起こしていたじゃないか」

「ああ、あれね。あれは、向こうが当たってきたから、ぶつかっただけだ。あいつらは、俗にいう当たり屋みたいなものだろう」

「そうか、わかった。でも、気をつけろよ」

「ああ」

ちなみに、今の会話の大丈夫かという言葉には、妹さん起きたら、嬉しさのあまり失神するぞという意味も含まれていたのだが、気にしないことにしよう。

そして、俺たちは席を立つ。やつは、妹をお姫様抱っここと呼ばれる持ち方で静かに持ち上げる。そんな姿に色々思うところがあったが、あえて、口には出さず、心の中にしまいこむ。

彼は三月生まれで、妹のほうは四月生まれということで、学年自体は一緒なため、そこまで身長差はない。だが、そんな妹抱えつつも、普通に歩いている友人の姿に俺は驚きを隠しきれなかった。

もちろん、そんな異様な光景を見て、注意を引かないわけがないので、周りからの視線が痛かった。だが、それは本来、明のほうに行っているはずで、俺には関係ないはずなのだが、何故か俺に対しても視線が集まっていることが不思議でならなかった。

そして、映画館を出ると、朝の天気が嘘のように見渡す限り、分厚い雲に空が覆われていた。

「お前、妹さん抱えて、先に行っとけよ。俺が妹さんの自転車も持っていくからさ」

「いや、悪いって。そんなことさせちゃ」

「こういう俺のたまにしかない善意はちゃんと受け取れ。それが俺からのお願いだ」

「・・・。ああ、分かったよ」

納得していない様子だったが、俺は気づいていない振りをする。そうして、両手に妹を抱えたまま、自転車をこいでいく友人を俺は見送った。

とりあえず、俺は唯の自転車が幸運なことに折りたたみ式だったので、小さくしてから、背中にひもで背負う。感想としては、思っていたよりかなり重い。その一言に尽きた。

ここから、家まで十キロ。これを背負ったまま、俺はたどり着けるのか、否、たどり着いてみせる。

そう決心して、気合で、こいでいく。こぐたびに、背中と足が悲鳴を上げる。こぎ始めて、もう三十分ほどが経過したが、まだ半分しか進めていない。だが、背中は今にも崩壊しそうだ。

疲れ果てて、息切れを起こしながら、こいでいると、雨が少しずつ降り出した。

「やばいな。ようやく、台風が働き出したか・・・」

小雨だったのは、ほんの一瞬で、すぐに大雨に変わった。朝から天気良かったので、傘など持ってきているはずもない俺はずぶ濡れになりながら、進んでいった。

無論、雷も鳴っていた。かなりの轟音。普通だったら、これが聞こえない人はいない。

だが、俺には雷の音が聞こえるわけではなく、そして、視界に雷を認識するのでもなく、全身に流れる莫大な電流を感じることも出来なかった。

俺に雷が直撃・・・したのか。

俺、死ぬんだろうなあ・・・。

すまない。明、唯・・・。

そう思いながら、俺の意識は漆黒の闇の奥底へと落ちていった。

プロローグ 異能が宿りし日（後書き）

俺と世界と電視の力、スタートです。

この物語は、普通の高校生として生きつつも、普通の高校生ではありえないようなふうに生きる少年の姿を描いたストーリーとなっています。

読んでいただいて、感想等ございましたら、お気軽に書いていただけるとうれしいです。

反乱の兆し

俺が目覚めたのは、どこか白い天井があり、白い壁に包まれた部屋であった。見覚えのない部屋で、最初は死んだのだろうと思った。だが、意識がしっかりしてくるに連れて、自分がベッドに寝かされているのに気づいた。どうやら、生きているようだ。

「北井大尉、大丈夫か」

「はい、山崎大佐」

突然の呼びかけに心の中は驚きが隠せなかったが、難なく乗り越えることが出来た。ベッドから起き上がり、敬礼をして、俺はそう言った。もう慣れたものだ。普通の高校生なら慣れているなどありえないはずだが、俺は諸事情による軍配属により、慣れていた。

そんな俺の目の前にいるのは、軍服に身を包んだ男だった。

「元気そうだな、ならいい。医療班に全力を尽くしてもらったからな。感謝しとけよ」

「そうですか、あとで、お礼を言っておきます。大佐、一つ、質問してよろしいでしょうか」

「何だ、話せ」

「目に何か異常を感じます。何やら、数字や矢印が見えますし」

そう、起きたときから、気になっていたこと。この数字と矢印。今、数字は百で矢印は左のほうを向いている。

「それは、医療班の検査の結果から見ると、異能だそうだ。具体的には、電気の流れ、および、強さが分かるらしい。そして、その異能の兆候が目だけではなく、全身のいたるところから、観測されている。だが、今、分かっている効果は目の部分のみだ」

「ありがとうございます」

「今回、君をここへ連れてきたのは、この会話のためだけではない」「何かございましたか？」

「ああ、今、この大阪に、異能を持つ者たちが続々と集まりつつあ

る」

異能、軍に所属する者は、部隊として存在するため、知っているが、一般には異能の存在は隠され続けている。それは、異能の存在が世界をゆがめかねないという政府の判断によるものだ。

異能が公式に認められてしまえば、異能を持ち、人より上に立った気分となる者も出てくる。たちが悪ければ、人を見下すという行為に至りかねない、それが政府の予測だ。

現在は、もし存在していても、異能保持者自身、周りから差別を受けてしまうことが目に見えているから、異能を隠そうとしている。そう、自分だけがそうなのだろうと思わされているから。だから、異能保持者自身が、公に使おうとしない。

だから、世界はまだ安定している。

これが、異能の存在が公のものになったら、どうなる？

人を見下すで済んだらいいほうだろう。これは、俺の見解だが、第三次世界大戦が起きる。異能保持者たちの反乱が始まりしたものとして。

そんなことを露知らず、異能保持者たちは、集まって、異能保持者の存在を公に知らせ、自分たちの存在を認めさせようとしているのだろう。おそらく、人数がそろえば、認めてもらえなくても思っているのだろうが、本当はその逆だ。

人は未知なる力に恐怖する。それが数が多くなればなるほど、大きな未知の力となる。それでは、認められるどころか、恐れになるだけだ。

「だいたい、状況が分かりました。おそらく、異能保持者たちの反乱目前といったところなのでしょう。ですが、どうしてそうなってしまったんですか？」

「察しが良くて助かる。だが、その原因に関しては、現在捜査中だ」
だとするならば、俺は何故呼ばれたのだろう。そう考え出したら、俺のすべきことを思いついた。

「了解です、俺が呼ばれたのは、異能保持者たちの反乱の時期予測、

および、反乱の鎮圧といったところでしようか」

「ああ、そうだ。いつものことながら、話がよくわかっているな。まるで、私の心の中が読まれているようだ」

「いえ、そんなことないですよ。俺にもわからないときがあるのですし。とりあえず、了解です。情報が分かり次第、報告します」

「ああ、よろしく頼む。それと、夢二」

久しぶりに本名で呼ばれた。久しぶりにというのは、この人が俺の本名を呼ぶときはプライベートの内容のときだけだからだ。

「何でしようか」

「あせりすぎるなよ。まだ、お前は若いんだ」

「分かりました。とは言え、俺が進まなければならないのは事実です。そして、今はあせらなければならぬ時期です。では、失礼します」

俺はあえて、山崎の言葉の持つ本当の意味から目を背けた。だが、それはたとえ、どれだけ目を背けたとしても、迫ってくるものだ。俺は知っている。

だとしても、俺は目を背けたかった。目を背けたら、いつか消えてくれるのではないかと思って。

そう言って、一礼し、俺は山崎に背を向けると、自動式のドアから出て行った。

遠距離ゲート

だが、その自動ドアを抜けた先はよく見慣れた俺の玄関だった。突然のことに驚いて、後ろを見る。すると、ドアの向こうには佐原大尉がいて、笑いながら、こっちを見ていた。

「試作機としては上々の出来栄じゃないの？これ、なかなかいい作品だと思うわよ、北井大尉」

通りすがりで目撃したら、十人が十人振り向くほどの美人さんが、微笑みながら、腕に巻いた機械を指しながら、言う。

最初に会ったときは、こんな一つ一つの仕草にどきどきさせられたものだが、今は見慣れたことによって、大丈夫になった。

そして、そんな彼女が腕に巻いている機械は、試作品として作ってみた遠距離移動用のゲートを作る機械で、そろそろ、実際に使ってみてもらおうかと思っていた品だ。

おそらく、まだ、エネルギー供給の部分が不完全だから、充分な動作はしないと思っていたのだが。

なんと言っても、部隊の長である大尉だ。エネルギーの量は一般と比べても、はるかに違う。そもそも、そのエネルギー量の多さも大尉の任命条件でもあるから、普通と比べやいけないのかもしれない。

エネルギーの供給不足で、動かない可能性もあると考えていたが、まあ、この人のエネルギー量から考えれば、当然の結果だろう。

「いえいえ、まだ、それは不完全な品ですよ。あなただからこのゲートを維持することが出来るが、他の人は無理だ。まだ、エネルギー供給のところが修正すべき点があります。ですが、ここまで、安定してゲートを開くことが可能というのも、結果としてはいいものです。ありがとうございます」

あごに手を当てて、少しだけ考える大尉。だが、それはほんとは少しの間だけで、会話が途絶えることはなかった。

「ふーん。でも、これはこれで、相当なものじゃないの。正直、これだけのものを維持しようとすれば、これぐらいのエネルギーは必要なのは当然だろうし。こんな試作品を作り上げて、問題点を解決できるような口ぶりで話すあなたはすごいわ」

「ありがとうございます。わざわざ、俺のためにゲートを開いてもらって。でも、まだ、不完全な品なんで、そろそろ、こここのゲートのリンクを切ってもらえると嬉しいです。まだ、そこまで、無理はさせたくはないので」

「ええ、わかったわ。あなたがそう言うのなら。じゃあ、さようなら、そして、おやすみなさい」

「さようなら。そちらも、おやすみなさい」

そうお互いに言うと、ゲートは閉じられた。そこに広がっているのは、もう、いつもの玄関。ゲートがあつたなんて、痕跡は微塵もない。それを確認してほっとした。

「原理的にはOKか。だとするなら、残りの問題はエネルギー面だ。だが、ここで、考え始めたら、徹夜確定だろうから、今日はとりあえず、ここまですておくか」

とりあえず、ここまですて区切りをつけることにする。それを考えるのは、また今度だと。

電子の王

そこで、俺は玄関にいることに気づく。

「ただいま」

「おかえりなさい、夢二さん」

そう言って、声をかけてくれたのは、仕事で、俺とは別居している両親に代わって、ときどき家まで料理を作りに来てくれたり、掃除しに来てくれたりする心優しい後輩の加藤麻利。

「ああ、ただいま」

「そういえば、夢二さん。昨日から学校休んでたみたいですけど、どうしたんですか？」

「ああ、雷が俺に直撃して、死に掛けた」

そう告げると、彼女の顔から血の気が引いていく。それはもう、ほんとに心配している顔で。

「あわわわ。だ、大丈夫なんですか。ど、どこか、お怪我は、異常が見られるのであったら、言ってください」

「ああ、大丈夫だよ。異状って言っても電気が見えるようになったぐらいだし」

彼女の顔に、徐々に血の気が戻っていき、蒼白だった顔も、いつもどおりに戻っていった。

「良かったです……。電子の王とまで呼ばれている先輩に電視の力なんて、鬼に金棒ってやつですね」

「電子の王って、大袈裟な。俺は、趣味でやったものを公開してるだけなんだから」

「その素晴らしさゆえに、あなたはネット上ではその名で呼ばれているのですよ。突如現れた顔を全く表に出さない無所属の開発者。名はルシフェル。だが、それも、ネットで出しているだけのネームに過ぎない。そして、電気の関わる品であれば、彼の作るものに勝るものはないとまで言われるようになった」

それは知っているが、さすがにネットって言うのは、大袈裟に扱
いすぎだと思う。単に、趣味の作品を公開しているだけなのに。

とりあえず、次の公開作品は、多分あのゲートに決まりだろうな。
あのゲートは、異能の力をエネルギーとして取り入れることも出来
るし、電気を使って動かすことも出来るから。

まあ、表に出す上では、電気で動くというふうにしかないが。

「すまないが、俺腹ぺこなんだよ。すぐに準備できるか？」

「ええ、というより、もう出来上がっていますよ。今回はカツカレ
ーですよ。試作品が出来上がったと聞いて、それのお祝いです」

そう、彼女にだけは一番初めに試作品が出来上がったことを伝え
ていた。

実を言うと、今回のものはどんなものを作ろうかと考えているとき
にアイデアをくれたのは彼女であった。

学校まで、家から直で学校まで行けるようにならないかなという
ささやかな彼女の言葉が今回の品のきっかけだったのだ。

だから、完成品ができれば、彼女にプレゼントしようと考えてい
る。ちなみに、完成品というのは、表に発表するものではない。

表に発表するのは、エネルギーとして各家庭に流れている100
? 電源が必要なものであるが、俺自身の理想としては、乾電池で動
かせるようにしたい。

それを渡そうと考えているのだ。

「まだ、試作品とは言え、今、使ってもらったが、どうやら成功み
たいだ。あとは、エネルギー供給の問題解決をして、麻利用に使い
やすくするだけだよ」

そうこう言っているうちに、リビングにたどり着く。リビングに
はちゃぶ台のような食事のための台と、テレビ関連しか置いていな
い。

これが、俺の家だ。基本的に作業は家ではしていないので、散ら
かることもない。ついでに言うと、散らかるようなことは、彼女が
いる時点で有り得ない。

彼女は根っからの綺麗好きだ。もし、片付いていないとか、汚れているとかあったら、自然と綺麗にしようほどのだ。

「いつも、ありがとう」

座った俺は、カレーを渡してくれた彼女にそう言う。

「いいえ、気にしないでいいですよ。私がしたいと思っているからしているんです」

彼女の気持ち分からないほど俺はバカではない。というか、去年の冬、告白された。だが、俺には、女の人との接し方が分からなくて、今はまだ、返事を待ってもらっている状態なのだ。

そもそも、女の人に限らず、人とともに接したことさえ少ないのだ。親はというと、仕事で小学生のときからずっと別居しているし、友達はというと、自分で家での生活を全てまわさなければならなかったのも、まともに遊べなかった。それゆえに、俺は家に引きこもりがちだった。

そこで、出会ったのは、回路やプログラム。パソコンの仕組みはどうなっているんだろうとか、ゲームの仕組みはどうなっているんだろうと調べ始めたのがきっかけだ。

回路やプログラムは忙しい俺でも、家ですることができるということで、親しみを覚えたのだ。

そして、中学生の頃、彼女と出会った。俺は中学校で立ち上げた電子情報部で。気合と根性で立ち上げた方がいいが、入ってきたのは彼女だけだった。

彼女に何故入ったのかを聞くと、

「それは秘密です」

というふうな一点張りで、結局答えは聞けなかった。

それから、俺が卒業するまで誰も入ってくることはなかったわけだが、俺と彼女は二人で楽しく活動をした。

部員の数が少なすぎるということで、かなり問題にされたが、活動における成果を発表することで、その問題は自然と消えていった。それなのに、何故、部員が来なかったかという、二人で突っ走

りすぎたからみたいだ。はつきり言って、顧問も理解できていなかったらしいし、その時点で普通の中学生ではなかったのだと、振り返ってみると思う。

こうして、今に至るわけだが、普通の会話は出来ても、まだ、恋とかそこらへんは全然無理なのだ。

俺自身、彼女に対して、何か思いがあるのは感じる。だが、これが、どういうものなのか分からないし、その段階で返事は、思ったのだ。

だが、彼女が俺にとってかけがえのない大切な人であるということは彼女には伝えている。そんな俺の事情を知っているからこそ、彼女は待ってくれているのだ。

俺の返事を。

電子の王と呼ばれている俺も、一端の人間。こういうのには弱かったりするのだ。

そうこう考えながらも、俺はカレーを食べ始めたのだった。

電子の王（後書き）

すみません。作者の事情により、かなり更新が遅れてしまいました。今後としては、来週はたぶん更新なしで、再来週には更新させてもらおうと考えています。

これからよろしくお願いします。

魔法文字

スプーン片手に、テレビのリモコンを手に取り、テレビの電源をオンにする。そして、チャンネルを変えるのは後にして、とりあえず、カレーを口の中に放り込む。

「うまい」

その一言に尽きた。これは、市販のものでは手に入らない紛れもない彼女がトレンドしたカレーだ。俺の好みに合わせた辛味、そして、ジャガイモ、にんじんといった野菜たちのお互いを認め合って合わさった旨みが絶妙な味わいをもたらしている。

「喜んでいただけて、嬉しいです」

カレーを一口一口味わいながら、目をテレビへと向けると、映っていたのは、近頃起きている電車やどこかの壁に対する落書きに関するニュースだった。

「これは、学校でも話題になっていますよ。それにしてもおかしいですよ、日本語でも、英語でもない。そして、該当する外国語も見当たらない文字なんて。まあ、字が汚くて、崩れてしまっているからってのが通説らしいですけど」

「確かに、俺もそうだと思う。他の説として、宇宙人とか古代の未知の文明の文字だなどと言っている学者もいるが、それはまず有り得ない」

「けど、何かがおかしい気がするんですよ。全部同じ文字で、それも、全国で発生している。同じ犯人という可能性もあったけど、同日に行われたとされるものまで出てきているし、何か組織的な動きを感じるんですよ」

時々、彼女は鋭い。実のところ、同じことを思っていた。明らかに組織的動き。それに、大佐が言っている異能の集団が集まっっているという事実。

さらに言うなら、彼女には負担をかけたたりさせるのが嫌だったか

ら、本当のことは言わなかったが、俺はあの文字のことは知っている。魔法使いの血を持ちながら、魔法使いであることをやめた者が、使用する文字。

魔法文字の一種で、言うならば亜種。その魔法文字は、そいつらにしか理解できない。ゆえに、普通の魔法使いにも理解は出来ないし、その存在自体知らないことが多い。

だが、俺はその文字を知識として存在は知っていた。意味は分からないのだが、あれがそれに該当することぐらいは分かる。

そこらへんを踏まえると、ここ大阪で何かが起きようとしている気がしてならなかった。

「気のせいだろ。確か三年前にも似たような事件があったけど、何も起きなかったじゃないか。今回もそれみたいな感じで、何も起きないだろう」

これは、彼女を納得させるための口実。この件にこれ以上踏み入らせないようにするための言葉。

だが、これも事実であることに変わりはない。

「確かに先輩が言うとおりですね」

どうやら、納得してくれたようだ。まだ、何かが起きると決まったわけじゃないから、これは保険だ。

そう、何かが起きてしまったときのための。

いつもとは違う夜

そして、カレーを食べ終えた俺は、食器を洗おうとする。だが、それを見た彼女は黙ってはいなかった。

「先輩、いいですよ。私が洗いますから」

「いや、いいよ。たまには、自分で洗っておかないとお前がいないと駄目なダメ人間になってしまう」

「それなら、別にダメ人間になってくれた方が嬉しいです」

俺の返しに対し、繰り出された危ない呟きに何か言わなければならぬ気がしたが、ここで言い出したら、おそらく、きりがないので、聞こえなかったことにする。

そして、スポンジに洗剤をつけ、泡を立てて食器を洗っていく。そうして、洗い終えた食器を置いていくと、彼女は俺と話をしながらも、その食器を拭いていく。

どうやら、食器を拭くことで納得してくれたようだ。そして、その協力のおかげか、そこまで時間をかけずに、後片付けは終了した。

「じゃあ、先輩、私はここで失礼します」

「ああ、いつもありがとう。今日も家まで送っていこうか」
そう言って、玄関まで一緒に歩いていく。

「いえ、今日はいいです。今日は、先輩の開発した試作品を使って、帰りたいです」

「いや、あれはまだ、試作品だから。まだ、無理だ」

予想外の答えに心の中では驚きはしたものの、表には出さず、冷静に対処する。

「だからこそです。先輩の理論によって、作られたものが完璧であるということを私の身をもって証明したいのです」

顔を近づけて、押し切ろうとする彼女。そんな彼女はもう言っても聞かないことを知ってる俺は仕方なく、了解することにした。

「ああ、わかったよ」

そう言って、試作品を取り出すと、彼女に手渡す。形状としては、カチューシャのような感じであるが、頭につけるのではなく、首につけるタイプだ。

通常は内蔵バッテリー使用しなければならないのだが、彼女には必要ない。

なぜなら、彼女は古代から続く血筋で、魔法使いなのだ。それゆえに、この機械に流し込むためのエネルギーの生成を自身で行うことが出来る。

何はともあれ、エネルギーを流し込んだら、声に出して、移動位置を指定するという方法か、行きたい場所を思い浮かべること、行き先を決めるという方法のどちらかで、目的地まで行くためのゲートが開く。

「では、さようなら、先輩」

起動ボタンを押した後、ゲートを開くと、彼女はそう言った。

「ああ、じゃあな」

それに対し、彼女は向こうで手を振りながら、ゲートを閉じた。

どうやら、今回も問題なく動いたようだ。

今の時間は21時。

まだまだ寝るには早いし、これからどうしたものか……。そんなことを考えていると、携帯電話の着メロが響いた。

だが、その着メロはメールが来たり、電話のときとは違うものだった。

俺の製作した防衛ネットワークの第一防衛に引かなかったことを知らせるメロディ。

それが、今響いたものなのだ。一応、千にも渡る防衛をしているため、今、第一防衛ならば、すぐには問題はないのだが、放っておいてやるほど、俺は甘くはない。

相手はハッカーやウイルスといったところだろうから、油断はならないし、何をして構わないだろう。

「さて、久々にやらせてもらおうかな」

そう言っ
て、パソコンの前に座る俺の顔には、笑顔しかなかった。

待ち合わせ

そして、次の日の朝。いつもより、起きるが遅くなってしまった俺は、軽く身支度を済ませ、食パンを口に放り込むと、足早に家を出て行った。

家から走ること十分。待ち合わせ場所に着くと、麻利が待っていた。

一応、時間としてはジャストだったが、麻利は十分から二十分ほど前にここに来ているのが、ほとんどのため、待たせてしまったという罪悪感が俺の中にはあった。

「すまない、遅くなった」

「まだ、遅れていないじゃないですか。今がちょうど、七時三十分です」

自分は待っているというのに、それがなかったかのように続てくる麻利。そんな彼女の姿を見ると、本当に申し訳ないという気持ちになってくる。

「でも、先輩、いつもなら十分前に来ているのに、今日はどうしたんですか？」

そんな暗くなった俺に、気をつかってか話題を振ってきてくれた麻利。そんな彼女の気遣いを見無駄にするのは、逆に失礼だということぐらいは分かるので、俺はその話題にのることにする。

「ああ、ハッカーが俺のパソコンに対して、ハッキングをかけてきたから、返り討ちにしていたんだが、気づいたら四時だった」

「先輩も無茶しちゃダメですよ。ていうか、先輩、朝四時に気づいたらなっていたのは……。一体、どれぐらいやりあってたんですか」

「確か、二十一時ごろから戦っていたから……。だいたい七時間か。」

「先輩とそこまでの時間渡り合うなんて、すごいですね。そのハッ

カーも」

言われてみて気づく。確かに、今回ののは大物だった。

一年前、軍の情報局で少佐にもなるような人が訓練および俺に対する試験で、俺の家に勝手にハッキングしたみたいだけど、そのときは確か、第五層目に入ったところで、そんな少佐であることなんて知らずに、返り討ちにした気がする。

それに対して、今回のやつは十層まで突破してきた。

だが、ここで驚くべきところは、そこまで突破してきたことだけではない。それよりも、そこまでの攻撃をしつつも、俺の自動反撃プログラムを含む攻撃を、第十層まで耐え抜いたということに驚かされた。

「確かに。今回のやつは軍にいた少佐を裕に越えていたから、相당한ものだよ。本当に、久々に白熱した戦いだっただな」

「先輩が認めるほどってことは、本当にすごかったんですね」

「まあ、そいつのパソコンは今頃、俺との戦いに敗れたせいで、大変なことになっているだろうけどな」

「ふふっ。さすが、先輩ですね」

俺の防衛ネットワークに組み込まれている反撃プログラムは、相手のパソコンをソフトウェア、つまりはプログラムの面から破壊するものだ。

そして、そのプログラムによる反撃を防ぎきれなかった場合は、パソコンは起動不可の状態まで陥れる。それが、俺のパソコンに存在する触れてはいけない竜の逆鱗の一端だ。

まあ、さすがに俺のパソコンを攻撃して来たやつに対して、無差別に反撃プログラムが襲い掛かるのは、あまりにも残酷なため、第五層までは単に、突破が厳しい防衛だけのプログラムで構成しているのだが。

「じゃあ、行くか」

「ええ、行きますか」

そうして、俺たちは歩き出した。ちなみに、まだ、時間には余裕

はあり、そこまで急がなければならぬわけではない。

だが、俺は昨日まで入院していたのだ。メールで伝えたとは言え、まだ友人たちには心配をかけてしまっている。だから、少しでも早く会って、安心させたかった。

それゆえに、俺は立ち話を、歩きながらに切り替えたのだった。

教師VS生徒

そうして、歩くこと十分。俺の通っている高校にたどり着いた。校門をくぐり、校舎に着いたところで麻利とは別れ、俺は自分のクラスに向かって歩いていった。

そして、自分のクラスに入ってから受けた一言目は

「やあ、夢二」

「まだ、死んでなかったのですか」

「おい、聞きたいことがあるんだがな。何故、体育という科目がある？」

なんでだろうか。まともな反応と呼べるようなものを明しかしてない。あの明だけだしかだ。確かに、他の面子もおかしいことは出会ったときから分かつてはいる。だが、ここまで、おかしいとは思っていなかった。

いや、もしかしたら、俺が入院していたのが嘘で……。

「なわけあるか！」

「どうしんだ、夢二？」

「やはり、仮病か」

「答えてくれよ」

それでも、普通に会話を何事もなかったかのように続ける二名。

それは明らかに兄と他人との態度が違う明の妹と、佳山明彦と呼ばれる完璧に室内系の男だった。

まあ、唯のその毒舌が俺の心を読み取ったかのごときものであって、少々驚かされたわけだが。

「まあ、いいや。とりあえず、おはよう」

「おはよう」

「おはようございます」

「ちーす」

それだけは統一性があることに俺はもう何とも言えなかった。そ

の後も、唯の毒舌と佳山の脈絡のない話は続き、気づけば、授業開始の時刻へとなっていた。

それは、この学校において担任とはいっていないものだからだ。会うのは、その担任が持つ教科の時のみ。

無論、朝の短いホームルーム（HR）はあるわけなし、教育相談といったものも、一年に一度だから、まともに話すのはそれだけだといっても過言ではない。

そうして、気づいたら、いつものように教科担当の教師が来て、授業が始まった。

それからは、佳山は睡眠、唯はノートをとって、まじめに授業を受けていた。そして、その兄はというと、机の上にはんだごてという回路を作るために使用するための道具を用いて、何かいじっていた。

明らかにこれはおかしいことだ。言っては駄目かもしれないが、寝るまではまだ分かる。だが、どうやったら、はんだづけという回路作りに発展するのだろうか。というより、電源を引っ張ってきているのだから、いわゆる盗電というものののだろうか。

だが、そのどちらをも凌駕する問題がそこには存在した。それは至極簡単なもの。何故、教師がそれに対して、何も言わないのかだ。気づいていないわけではない。いや、確実に気づいてはいる。なぜなら、机の上で堂々なのだから。

それを教師は何も言わないまま、授業終了のチャイムが鳴ると、何事もなかったように、教師は出て行った。

「明、お前、何故、授業中にはんだづけしているんだ？」

「ああ、そういうえば、夢二はいなかったのか。えっとな・・・」

それから説明を要約していくと、こんなものだった。明は授業中にいつもと同じように、本を読んでいた。だが、それがついにばれて怒られたらしい。そのときに、冗談だろうが、テストで満点とってからにしろと言われたらしい。

それに対し、明はこう返したのだ。

「じゃあ、皆さん教師で私に対して、テストを作ってください。それで、満点取れたら、文句はないですよね？」

「ああ、いいだろう」

その態度に教師は苛立ったのか、そんな約束をしてしまったのだ。そして、その一日後、教師は各々の全力を出して作ったテストを明の前に持ってきたのだという。

「では、これを今から、百分の間に全てを解き、答えが合っていた場合は、授業中何をしてても文句は言わない。それによる授業態度の減点を行わない。もし、満点じゃなかったら、授業中一切こんなことはしないようにしましょう。それで、よろしいですね？」

「ああ」

それは、実際のところ、大学院生でも解くのが難しいとされるものだったらしい。それは、言ってしまうえば、大人げないわけだが、それでも、授業をまともに受けない生徒を更生させたかったのだらう。

だが、彼らは知らなかった。明の底に眠る知識のデータ量を。

「解けました」

「よし、いいだろう。一時間ほど、ここで待っている、採点をここで行う」

だが、自信ありげだった教師は、絶望した。なぜなら、難癖のつけられるようなところすらないほど、完璧な答えだったのだ。それは、もう、高校生ではなかった。

「お前……。一体何者なんだ？」

「僕は、単なる一人の高校生ですよ」

そう答えて、明は帰ったのだという。それ以降、何をしても文句を言われなくなったのだという。

「おいおい、お前。先生に勝ったのかよ……」

「ああ、そうだよ」

そんな軽々しい答えに俺はもう言葉も出なかった。

教師VS生徒（後書き）

今回、教師VS生徒ということで、面白いバトル（？）を描かせてもらいました。

普通なら、有り得ない。

そんな小説ならではの話でありながら、もしかしたら、有り得るかもと思わせるような話となりました。

まあ、こんなふうにかけてしまったら、教師も何もいえないだろうなあと思いつつ、執筆に戻ろうかと思っています。

これからも、よろしくお願いします。

ランチタイムという名の戦

そして、同じように二時間目が過ぎ、気づいたら、昼食時になっていた。

午前中の授業は、佳山は睡眠、明ははんだづけ、唯はきちんノートをとるといふうで、全くもって変わりはしなかった。

無論、明のしていることは全教師が完全なる無視であったのは言うまでもない。

そして、佳山に関しては、起こせと言われて、近くの生徒が起こそうとしたのだが。ゆさぶっても起きることもなかったし、教師が教科書の角で思いつき叩いていたが、起きることはなかった。

そのときの音は、起こすための音ではなかった。そう、言うならば、ハンマーを振り下ろしたときにするような鈍い音。

そんな音がしたら、頭が生きているかどうか疑うものだが、明いわく何度もやられているが、問題は出ていないらしい。

こんな状況だけを見れば、唯が一番いいように見えるのだが、朝のような毒舌やらなんやらがあるから、結局だれがまともとか言うことは出来ない。

そして、四時間目が終わったわけだが、それはあることの始まりを指し示していた。

ランチタイム。それは、学食の先着三十名だけが食べられるという限定メニューを争う、いわば、戦争。

チャイムがなった瞬間、走り出す生徒、ドアは大きい音を立て開けられて、無論、そのまま。

そして、その真っ先に飛び出していった生徒には見覚えがあった。

佳山明彦。午前中四時間全て寝ていた言うならば猛者だ。

彼は、運動が嫌い、いや、精神的に拒絶していて、体育も無理だ。なのにも関わらず、あの戦いで負けたことはない。

おそらく、彼にとって、午前中の授業は、昼の戦に向けての休息

なのだろうが、それは、学校に来る意味として本末転倒と言うものなのだろうが・・・。

まあ、実際見てみたことがあるが、確かにこの戦いは激しい。それはもう、かなりの体力を消費し、怪我まで生むことがあるほど。生徒によっては曲がり損ねて壁に激突しているやつすらいる。そんなドジではなくても、メニューの注文の際は、完璧なる押し合いだ。

それは、まさに力ある者のみがメニューを手にすることが出来るというもの。

そんな怪我とか激しい体力消費が見られるなら、メニューを限定数ではなくて、無制限にしろよという話なのだろうが、実際にそれはやってみたらしい。だが、それをした瞬間、客が激減したらしい。人がいたらまだましだろうが、客は0になったらしい。

それでは、食堂が成り立たないということで、結局限定数にしたままらしい。

そんな裏事情を聞いて、どれほどのものか確かめるために、一年の頃、その戦に参加したこともある。だが、あれには、どうやっても勝てる気はしなかった。

生徒はこれを何かのスポーツもしくは競争の一環として行っているのではないかと思われている。

それに対して、俺は・・・もちろん参加しなかった。

「まあ、ご苦労なことだ」

そう呟く俺は弁当派だ。今となっては、そんなめんどくさい競争のために、体力を使う気もないし、何より、そんな食堂メニューよりもおいしいに決まっている麻利の料理があるのだから充分だった。さて、どうしようかと周りを見渡す。

俺の友人たちは、佳山は走って行っだし、明は何か組み立ててるし、唯はそんな兄貴を上目遣いで、ずっと見ている。

どうやら、だれも食べるような相手がいないようだ。

「なら、屋上にでも行くか」

そう独り言を呟いて、弁当もって、廊下に出ていった。

穏やかな屋上

開きっぱなしのドアを出て右に曲がり、真っ直ぐ進んでいく。その突き当りをまた右に曲がって、見えてきた階段を上っていく。

そうしたら、見えてくる扉を針金という名の鍵を用いて、オープンする。無論、正規の鍵などもっているわけがない。

俺は学校の教職員に関係者がいるとかそういうのではないのだから。

そうして、入った屋上は太陽の日差しが気持ちよかった。ということもなく、暑いぐらいだった。

だが、吹き抜けるそよ風によって、そんな暑さは消えてしまう。そんな快適な場所で弁当を食べて、寝るのがすごく好きなのだ。

「先輩、今日はお早いですね」

食べようと思って、弁当のふたを開けたとき、ふいに声をかけられた。声の主はわかっている。

「やあ、麻利」

「こんにちは」

それは偶然の鉢合わせではない。晴れた日は大抵こうなる組み合わせだった。俺は気持ちよく寝ることが出来るここが好きで、彼女はここが快適だからと言う理由で、来ている。

実際、彼女をここへ俺が誘ったわけでもないが、自然と来ているような状態だ。

俺はあいさつをかわすと、箸を手に取り、弁当を食べ始めた。

「先輩、あの試作品、ありがとうございます」

「いや、気にするなよ。でも、あれはまだ試作品だ。もっと、使いやすくしてやるから待ってろよ」

そう、あれは試作品。普及させるには、まだ早い。燃費の悪さ、個人の保護、セキュリティ、他にもまだ問題点はある。

あれは、形ができて、成果が得られただけの初期段階。

「楽しみにしています。でも、今日のように無理はなさらないでくださいね」

「ああ、分かってるよ」

今日。つまりは、夢中になりすぎて、寝るのが四時になってしまったこと。自分が感じる限り、そこまで無理をさせている感じもない。

だが、それは表面的なもので、疲労というものは蓄積されていくもの。

気をつけなければ、改めてそう思った。

「そう言って、無茶しているんだから、困るんですけどね」

「ハハハ・・・」

笑うしかなかった。以前もこんなことを思ったことが合った気がするが、結局このさまだ。あまりにも、俺の性格が見抜かれていて、何ともいえない感じ。

だが、それは二人が過ごした時間の長さを示していると思うと、自然と、嬉しくなっていた。

そうこう話しているうちに、俺は弁当を食べ終わり、麻利は俺に比べると少しだけ遅れて、ランチタイムは終了した。

「ここ気持ちいいし、俺は寝ることにするよ」

「ふふっ。いつもどおりの先輩ですね」

「久々のここだからな。あと、今日は先に帰っといってくれ」

「はい、わかりました」

先に帰っておいてくれというのは、俺が軍からの仕事をするという意味を指している。そう、それは、長年の付き合いだから成り立つ会話。

彼女はそれを分かった上で、返答をしている。

「気をつけてくださいね」

「ああ、大丈夫さ」

そう言って、俺はそのまま背中を後ろに転がして、寝転がると、眠りについた。

破られた均衡

そして、俺は昼休みの終わりを告げるチャイムとともに、目を覚ました。彼女の姿はもうない。それはいつもどおりのことだった。

彼女はクラスの委員長。担任がいていないような存在である代わりに、彼女のようなクラス代表が配布物等を配ったりなど、仕事をしているのだ。

それは、この学校の生徒を主として、教師はなるべく介入しないというこの学校の性質を代表する一角だ。

他にも、執行者と呼ばれる一学年に三人の選ばれた生徒による九人会と呼ばれる生徒会の実施。そこで、普通の授業以外のことならほとんど決めることが出来る。

そういえば、そろそろ、選抜だった気がする。とは言え、俺には関係のないことだ。

話を戻すと、はっきり言って、ここは生徒が主権を握っている学校なのだ。

だが、それでは、教師の意味がかなり減ってるといふふうになるではないかと他の学校に行っている友人に言われたことがある。

そうは言うものの、教師という存在はその字の通り、教える師であり、言ってしまうえば、授業以外は必要ない。

それにより、教える以外しなくてもいいことによって、自由になる時間は、個人の研究に用いて、成果を挙げることがこの教師でいるための条件とされる。

だから、この学校には、世界的に有名な学者となっているような教師もいるのだ。

それにより、教師のレベルを高め、授業のレベルを上げるそれが学校の狙いだ。

教育の向上のために、最低限のこと以外は省いた仕事しかない教師、それを補うようにして、権力が与えられ、負担が増えた生

徒。

なんというか、皮肉のようにも感じる。

教育の向上が目的で、何故、生徒にかける負担を増やすのか、それは本末転倒な気もしたが、長きに渡る学校の方針のようなので、変わることもないだろう。

そんなことを思い返していた俺は、もう一度空を見る。

「きれいな空だ」

そう言って、手を伸ばす。だが、その手は届くことはない。どんなに願っても。

そして、しばらく空を見つめていると、携帯がバイブしていることに気づいた。

それは、メールの長さではないコールだ。だが、こんな授業が始まる前に誰だろうか、そんな疑問を抱きながら、携帯を開く。

そこに書かれていた名前はない。ということは知らない人、もしくは登録していない人と普通は思うだろう。

だが、俺には、その時点で、相手が誰か、すぐに分かった。

「もしもし」

「私だ」

それは、大佐の声。通信が傍受されてしまった際に発信源を突き止めるのを防ぐために行う電話番号の改ざん。

そして、全てのネットワークが介入できないような、無線電話の回線の生成。それをするために、電話のたびに変わる番号なのだ。

「大佐、今日はどうなされたのですか？」

「私たち、軍部に何者かがハッキングを仕掛けてきた」

「本当ですか、それは」

「ああ、それで、北井大尉の方は大丈夫か」

「ええ、実を言うと、こちらにも襲撃を受けました。それも、相当の手錬だと思います」

俺は何事もないように冷静に回答したものの、内心では驚いていた。そう、俺のところを襲撃してきたというのは、まがいなりにも、

一般で使っているのだから、まれに起きるのは理解できる。

そして、軍が襲撃を受けるのも、まだ、可能性としては理解できる。

だが、その襲撃が同時期に起こるというのは、明らかにおかしいと思ったのだ。

「こちらにも、そのとき、その現場にいたやつがいたから、一命を取り留めたが、何件か突破されしまった」

「すみません、俺がいまいばかりに」

「いや、気にするな。大尉は、帰ってよかったのだから。だが、それでも、あいつは結構なやつだったのだから」

俺にその事実は更なる驚きを与えた。あの軍には、俺の自宅に完備している自作防衛プログラムの一世代前が置かれていたのだ。

最新のものは、出来たのが、つい最近だったのと、バージョンアップには時間がかかることがあったため、やっていなかったのだから。それでも、充分、並みのハッカーや俺の家にハッキングを仕掛けてきた彼なら余裕で潰せるほどの強固なものだったはずだ。

そして、プログラマーなしで、その性能のものに、きちんと人が付いていたのだから驚いているのだ。

「だれですか。そのときの担当は」

「草薙だ」

「やつほどの腕がありながらですか」

彼は俺が認めるほどの腕の持ち主だった。プログラマーとしては、D言語と呼ばれるプログラミング言語の開発を行ったことで、一躍有名となったことで、知られるほどの人物だ。

その言語の主目的は、ハッキングやウイルス等から、守る。つまりは、ディフェンスのDをとったらしい。

それを見させてもらったが、面白い要素が結構あって、興奮させられたのを覚えている。

性能に関しても、問題はなく、俺も突破するのには苦勞させられた。

そんな彼が、いながらだと・・・。

「ああ、そうだ。さすがに、驚かされたよ。大尉の防衛プログラムがあり、彼がいながら、突破されるなど、想像も出来なかったからな」

それは、完璧な計画的犯行。おそらく、俺を襲ったのは、俺を家の方に集中させて、出られない状況を作るため。

そう、そのハッキングに対する防衛の要請が来たとしても。

「そういえば、何故、防衛の支援要請を出さなかったのですか」

「すまない、それはこちらの判断ミスだ。いつものように、草薙とセツトなら大丈夫だと思っていたんだが」

「そうですね、彼と俺のプログラムがあったなら・・・」

それは、冷静な大佐が見せた久々のミス。だが、そこまで、気にしてはいなかった。

なぜなら、要請を受けたところで、結果は変わらなかったのだから。

「過ぎたことを気にしても仕方ないだけです。今、何をするか重要です。大佐にお頼みしたいことがあるのですが、よろしいですか」

「何だ、大尉が私に頼みごととは」

「異能の保持者が集まりつつあることに関してです。大佐は、近頃各地で起きている落書きのことをご存知でしょうか」

「ああ、知っているが、それがどうした」

「あの文字は見たところ、魔法文字の一種と思われます。おそらくは、魔法使いの血を持ちながらにして、魔法使いであることをやめた者が、使用する文字で、亜種だと思われます。ですが、私にはその意味が理解が出来ませんし、俺の任務とずれてしまっています。よろしければ、調べていただけないでしょうか」

「ああ、いいだろう。それは、本来、我々が調べるべき、今回の一件の原因に繋がりそうだからな」

それは、俺には理解でかった文字。そして、調べるには多大な時

間がかかってしまいそうな事柄。だが、俺には、それを頼める人がいる。

それを俺は幸福だと思った。

「ありがとうございます。では、失礼します」

「ああ、ではな」

それを最後に俺は、電話を切った。さすが、大佐だ。誰もいない俺が一人のときを狙って、電話をかけてくるとは。

だが、これで、何かが組織的に動いているのは確実なものとなった。あとは、その尻尾を掴み、目の前に引きずり出してやるだけ。

「さて、そろそろ、俺も真面目に動くとしますかな」

一言だけ呟くと、俺は扉を開く。だが、その先にあるのは階段ではない。

そこはそう、自分の部屋だった。

表と裏

内臓バッテリーの使用により、ゲートを開いた俺は、部屋に入ると、すぐに閉じた。無論、今から、授業がないわけではないので、本来は戻らなければならない。

だが、俺は、それ以上に、今回の件が大切なように感じた。

だからといって、これから先、解決まで休み続けるわけにはいかないのは、進級とかに関わってくるからよく理解している。

だが、今日の午後からの授業は、出席に関しては言うなら、欠席なしで出ていた授業なので、問題はない。

ちなみに、この学校では、各教科その授業の総回数のうち、三分の一以上欠席した場合、強制的に、欠点となるようになっていく。

とは言うものの、それだと再試験という制度にのっとれば、問題ないという抜け道があるのだが。それは、出来るだけ使いたくなかった。

というより、進級できないから、再試験受けます、その理由は、欠席が多かったからですなんていうのは、個人のプライドとしては許せなかった。

まあ、そんな感じで、軍務が忙しいときは、授業を抜け出している俺は、自分が軍所属など学校側にも伝えていないため、不真面目な生徒と思われるだろう。

そうだとしても、俺は素性を晒そうとは思わなかった。学校の警備は、個人情報扱っているのだから、強いと思うかもしれないが、かなりもろい。

そんなところに、俺の情報を預けておくのは不安で仕方がなかったのだ。

そんなわけで、ここにいる俺は帰宅後すぐにパソコンを起動させた。起動するまで、待っているのは時間の無駄なので、制服を私服に着替える。

そうしているうちに、俺の部屋中に起動音が鳴り響いた。それを聞いた俺は、パソコンの前へ戻って、椅子に座ると、活動を開始した。

まずは、ネット経由で、学校にいる間動かしていたプログラムの結果を表示する。

それは、彼が昔に作成した品の一つ。明が作り上げた無線機を用いて、そこから出た電波を受信したら、パソコンを起動。

その後、起動をした合図が電波として受信され、その後は無線機を用いて、パソコンを操作という手順で使えるシステムによるものだ。

だが、これは、明の作品にしては珍しく、欠点がある。無線機からパソコン、正確には受信部までの距離が三キロ以内であること。

この距離を越えると、操作は不可なのだ。

それでも、学校までの距離は充分なほど満たしているから、問題はない。

それで行ったのは、ハッカーの所在地の調査。

さすがに、今日の朝は戦い終えた後、眠かったり、疲れたりしていたため出来なかったが、やらねばいけないことだったのだ。

「結果は・・・と」

表紙されるウィンドウの情報を眺めていく。

「フォーリンアブジェ・・・」

漢字表記では、墮天使。自分たち異能保持者が人の上位種であると考ええる組織。

そう、現実を見れていない組織。だが、今回の一件には大きく関わっているような組織だった。もし彼らが関わっているのなら、異能保持者が組織的動きをしているのも理解できる。

だが、理由についてが理解できない。何故、ここを集結場所として選んだのか。ここ大阪は、首都ではない。

こんな都市で行ったところで、得られる結果は大したものにはならないはずだ。

政治の拠点は、首都東京なのだから。

「だとしたら・・・」

そう思わず、心の中の声が現実に出て呟く俺。

だが、おそらく、この答えはしばらくでない気がする。いや、彼らに会って、聞かなければ。

そう思考を切り替えると、パソコンの電源をきる。

そして、椅子から立ち上がると、またも、ドアに向かって歩き出す。

もう一度、ゲートを開く。

「さて、下調べは終了。本番に入るか」

そう呟く俺には、もう学校にいたときのような表情はない。そこに宿っているのは、標的を狙う虎のような底知れぬもの。

そうこれが、倉本夢二のもう一つの顔だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2304w/>

俺と世界とテレビの力

2011年11月24日21時54分発行